

仏様のおはなし新シリーズ第97集「聖徳太子の悲願」

浄土真宗のお寺の本堂には、聖徳太子の御影（ごえい）の掛軸がかかっています。その掛軸の上部には、銘文（めいもん）とよばれる次のような文章が書かれていますが、その言葉や意味については多くの方はご存知ないかもしれません。読み下（くだ）していいますと、「吾（われ）、利生（りしよう）の為（ため）に彼（か）の衡（こう）山（ざん）より出（い）でて、この日域（じちいき）に入（い）る。守屋（もりや）の邪見（じやけん）を降（こう）伏（ぶく）して、終（つい）に仏法（ぶつぱう）の威徳（いとく）を顯（あらわ）す。」とあります。その意味を私なりに訳してみれば、「私は、前世は中国の衡山つまり天台山（てんだいざん）にいた惠思（えし）禅師（ぜんじ）であつたが、この日本に聖徳太子と生まれ変わつたのである。仏教を取り入れることに反対するという誤った考證の物部守屋（もののべのもりや）を降伏させて、ついにこの日本に仏法（ぶつぱう）をお迎えしその大きな徳を顯（あきら）かにしたのである。」とでもなりましょうか。守屋（もりや）の邪見（じやけん）というのは、「日本は古来から神々を拝んできたのであるから、異国の神である仏教の導入には反対である」というものです。

こうして日本に仏教を根付（ねづ）かせられた聖徳太子は、「十七条憲法」を制定して仏教精神による理想の政治を求めていかれました。

その後、仏教と神道の関係は、時代の流れに伴（ともな）つてさまざまに変わつていきましたが、現在は多くの宗派が、神仏（しんぶつ）混淆（こんこう）という神と仮の違いがはつきりしないものになつてゐるようと思われます。

そのなかで浄土真宗だけは、親鸞（しんらん）聖人（しょうにん）が『教（きょう）行（ぎょう）信証（しんしょう）』にはつきりと、「仏（ぶつ）に帰依（きえ）せば、ついにまたその余のもろもろの天神（てんじん）に帰依せざれ」とお示しになられたように、阿弥陀如來の本願（ほんがん）一つを拠（よど）ころにして、神を拝まない宗旨（しゅうし）です。聖徳太子を終生（しゅうせい）心の拠（よど）ころとして崇（あが）めていた親鸞聖人の教えが、結果的に聖徳太子の悲願を実現しておられるとも受け止められます。ですから、真宗寺院のどこを探しても、他宗のように神棚や大黒天（だいこくてん）を祀（まつ）つていませんし、どの住職の車にも交通安全のお札は下がつていません。

なぜそうなるのか、このことに焦点（しょうてん）を当ててお聴聞（ちようもん）することも、大切ではないでしょうか。

今回は、城南区友（とも）丘（おか）の妙泉寺住職でした。

